

# 国際京都学だより

第6号 二〇〇七年（平成十九年）三月十日（土）

編集：国際京都学協会事務局  
〒六〇四八三三 京都市中京区西ノ京小堀町二五三  
ホームページ <http://www.kyotogaku.org/>  
Eメール [info@kyotogaku.org](mailto:info@kyotogaku.org)

発行：国際京都学協会

題字は書家・杭追柏樹（くいせこはくじゆ）氏

## 二十一世紀の京都—日本の中の位置付け

副理事長 中村順一

一昨年十二月、協会の研究会で、「世界に京都を発信する」と題して、国際的にみた、将来に向けての京都の可能性について話をさせて頂いた。学術研究都市、文化芸術都市、大学都市、ハイテク都市、産学官連携都市、歴史都市、宗教都市、文明間対話都市、環境都市、食文化都市等、その可能性は多岐にわたる。今回は、その続篇として、「日本の中の京都の位置付け」という視点で、所感の一端を記させて頂くこととした。

二一世紀の日本は、明治維新、第二次大戦後に続く、激動の時代を迎えると思う。国内では、廃藩置県のような大変革の可能性もある。首都圏一極集中是正の中で、地方をどうするか、どう形造るかということが大きな課題となるであろう。その中で、京都がどう位置付けられるかは、京都にとり極めて重要である。以下、五項目に分けて問題提起をすることとした。

第一は、道州制の導入である。北海道を始め国内各地域で具体的な検討が進められ、最近、政府も本腰を入れ始めて、にわかに関西圏を帯びた身近かな問題となった。関西は、当初積極的な時期もあったが、その後は盛り上りに欠けている。地盤沈下が指摘されている関西で、関西の持ち味と強みを活かした、思い切った関西圏構築の議論があってもよいのではないか。その中で京都がどうなるのか。遅れ馳せながら京都でも、問題意識を持ち、議論が交わされてもよいと思う。

第二は、首都機能移転である。実現は当面無理との見方が多い中

で、畿央、三重地域が三候補地域の一つとして残っている。関西は当初これに冷淡であったが、数年前頃から漸く関西財界も、関西にとつて重要であるとして関心を表明し始めた。京都は畿央地域に入っており、歴史的、文化的背景からも、畿央地域という広がりの中で重要な役割を持ち得る。首都機能移転という視点で、京都から京都の位置付けについての提言があってもよいのではないか。

第三は、京都における宮内庁関係行事の推進である。これは、京都の人々にとつて最も入り易いと思う。京都には、京都御所、大宮御所があり、一昨年には国の迎賓施設である京都迎賓館が開館した。一千年以上の都としての歴史を有する京都で、宮内庁関係行事がもっと行われてよいのではないかとと思う。これを京都の総意として要望を表明しては如何であろうか。

第四は、京都にふさわしい「特区」の設定である。既に全国で九〇〇あまりの特区が設けられ、京都市でも四特区が実現した。冒頭に述べた「世界の中の京都」という視点で、京都にふさわしい、京都ならではの特区がもっとあつてよいと思う。例えば、二〇世紀とは異なる二一世紀のシリコン・バレーといった国際的な頭脳・文化の集積拠点を志向するものもよし、世界有数の国際的な知的交流の拠点を目指すのもよいと思う。

第五は、「京都創生」である。これを国家戦略として位置付けるという動きが高まってきているのは喜ばしい、内容として、景観、観光、文化の三つの大きな柱が掲げられ、何れも極めて重要で、今後とも引き続き推進すべき分野であることは勿論である。唯、

これらは、どちらかというところ「守り」ないし「遺産」に立脚している。これからの京都には、前記三分野に加え、将来に向けた世界中での、より積極的な位置付けが併わせてあってもよいのではないかと、というのが筆者の持論である。

京都は、世界の中でも、国内でも、可能性に富み、その意味で極めて恵まれている、ユニークで貴重な存在である。京都の課題は、これらの恵まれた可能性を如何に実現していくかである。京都が、自らの可能性を十分認識して、そのための努力を傾注しないと、折角の可能性が活かされず、小さくまとまるだけにとどまったり、場合によっては、「ジリ貧」の方向を辿る危険もなしとしないと思う。国際京都学協会でも、最近の活動の盛り上りの中で、中長期的視点に立った京都についての議論が展開することを期待したい。

(国立京都国際会館館長)

## 京都とベトナム

### 香川孝三

二〇〇六年度の総会で国際京都学協会の事務局長を担当することになりました香川孝三でございます。本職を持ちながらの仕事ですので、行き届かないところがあると思いますが、よろしくお願いいたします。

二〇〇四年四月から二〇〇五年九月まで在ベトナム日本国大使館・公使として勤務しておりました。外務省改革の一つとして民間から外交官を登用して、風通しをよくしようという政策が採択され、その方針に即して、神戸大学と外務省が人事交流することになりました。その第一号として、私がベトナムで働くことになりました。私の大学でのポストを活用して、外務省の人が授業をされました。

ベトナム勤務中、ベトナムと日本との交流、特に京都との間でどのようなつながりがあったのか、またあるのが大変気になっていました。大使館では広報文化を担当することになっていたので、余計に気になるどころでした。

現在では、日本の企業約一〇〇〇社がベトナムに進出し、その中には京都の企業も含まれています。工賃はやすいが、手先が器用なことから、着物の縫製もおこなわれています。一九九七年から絹製着物のベトナムからの輸入が記録されており、その中には京都にも入っているものと思われます。

日本企業がベトナムに進出するきっかけとなったのは、ベトナムが市場経済化政策を採用したことですが、その政策を最初に提唱した経済学者グエン・スアン・オアインは、一九四〇年に日本に留学し、約一〇年の日本滞在中、京都大学で経済学を勉強しています。

京都とベトナムが結びついたのは朱印船貿易です。角倉了以・与一はハノイで交易をしていた記録が残っています。日本人町のあったホアアンにも出かけていたかも知れません。

一七二八年徳川吉宗にバタビアの東インド会社から贈られた象を操っていた人がベトナム人であったようです。当時から季節風を利用してベトナムと日本はつながっていたようです。遣唐使であった阿部仲麻呂が日本への帰国中、船が難破してベトナムまで流され、助かったこと、長安にふたたび舞い戻ったあと、安南節度使として、現在のハノイで勤務したことはよく知られています。ハノイの地下にあるタンロン遺跡が現在発掘中であり、阿部仲麻呂が勤務していたことを示す証拠が発掘されるかも知れません。

それより以前には奈良の大仏の開眼式に、ベトナムから僧侶が参列していた記録も残っており、正倉院に保存されている伽羅はベトナム産であります。雅楽にある林邑楽はベトナムの音楽とされています。このように、古代から日本とベトナムはつながりがありました。日本の都だった京都ともつながりがあったものと思われまます。

以上のように、古代から現代にまで、日本とベトナムはつながりがあり、人間の行動範囲の広さに驚かされます。国際的なつながりも国際京都学協会が追求していくべきテーマでありましょう。そのあたりを、これからも追求してみたいと思っています。(神戸大学教授)

「国際京都学協会」は一体何をする団体か。いわゆる「学会」や「倶楽部」ではない。入会案内には『京都に関心をよせる人々のつどいの場』と書かれている。しかし、ただの「つどい」ではなからう。伝統的京都を知り、新しい京都を創造するために多様な人々が交流する場であらうと思う。

『海外に行くことと日本のことが違って見える』『京都の中に行くと京都がわからない』、しかしまた『京都の外からは内部のことはよくわからない』。京都に限らずどこの土地でもそこに住む人々は『よりよい生活』を願っている。それを実現するのが文明というものである。文明にはその背後に文化がある。では「京都文明」、「京都文化」とはいかなるものか。それを京都の住人、京都以外の住人、さらに日本以外の住人などが、『京都』を主題にして京都文明を構築するために忌憚無き激論を戦わす場であると私は考えている。

京都の魅力は狭い空間に様々な事柄が集中して存在していることではないかと思う。一二〇〇年の歴史の間に培われた生活の場には重みがある。一朝一夕には実現できない時間の重みがある。一点豪華主義にふさわしいものはあちこちの地方にはある。東京にもたくさんあるが残念ながら深みが無いものが多い。

都市には様々な住人がいる。商業に関わっている人は観光客とか売り上げに関心がある。単なる住人は生活のインフラや物価や利便さに興味がある。京都の生活空間のゾーニング構想や観光客五〇〇〇万人誘致などは一部の人々にはまったく関心がない。伝統という概念も議論しなければならぬ。

外から見た京都のイメージは誤解も多いが、しかしそう感じさせる何かがあるであらう。間違っているのではなく、その誤解がなぜ生じているかを考えてみなければならぬ。特に外国人が見た京都についての評価は、伝統や歴史を理解した上ではなく、生態としての現代京都の姿に対す

る意見としてよく吟味してみるのが重要である。

単なる「つどい」の会ではなく、より良い生活を目指して様々な分野の人々が語り合って具体的な提言を出していくことが必要である。

(龍谷大学理工学部教授)

### 第5回京の川研究会報告

#### 「京の川と音景観」について

武部 宏

長年ラジオ放送に携わってきた者として、京を語るときに、最近の景観論争もそうですが、音がスポツ！と抜け落ちているように思えるのです。京の魅力となれば先ず登場するのが景色であり、祭りであり、美味しいものであったり、目に見えるものばかりです。申すまでもなくラジオはことばと音の世界です。テレビに慣れきって音のすばらしさ、音の力を忘れていくのかもしれない。

例えば、鴨川の川原に、良きほどの間隔を空けて語り合っているアベックは水の流れを音楽として聞いているから恋の言葉が出てくるのです。祇園祭も本来は音の祭り、時代祭りの装束もすばらしいのですが、先頭を往く維新勤皇隊の鼓笛が祭りの全体像を見事に表現しています。しかも、御所の砂利道を足を曲げずにすつくと伸ばして歩き、足音までもが音楽になっていくのです。

今は街中からほとんどいなくなった物売りの声も音楽そのものですし、神社の桧皮葺の屋根から滴り落ちる雨音もリズムカルな響きを奏でていきます。

いささか前段が長くなりましたが、若い研究者でテーマをサウンドスケープ、京の音景観と定め、それでもって学位をとった人に出会ったのです。京都精華大学専任講師の小松正史さんです。京の川をシリーズで採りあげてきた我が協会としてもこの際、京の街を「音景観」

(つづく)

として考えてみることにいたしました。

今回の企画については日曜日朝のラジオ番組「武部宏の日曜トーク」でも何度かお知らせをいたしましたので、当日の会場は初めて参加したという人も多くほほ満員となりました。芳賀理事長も参加してくださり、最前列の席から話の中にどんどん割って入ってこられ、途中からは双方向の対話のような進行になり、盛り上がった会になっていったと思います。

小松さんは外出時には録音機を持って京の自然音、生活音を録りまくって来られた方です。鴨川の水音一つをとっても、源流の志明院に始まり上流中流下流と様々で、さらに耳の高さで音が変わるといいます。そして、忘れてならないのが京の風土を象る水の気配を指摘されました。川辺はもちろん湧き水や井戸、その水を恵とする地場産業と音風景の豊かなことに驚きました。鴨川に始まり、宇治上神社の雨、和傘の雨、松尾大社の亀の井の水、無隣庵の庭、詩仙堂のししおどし、と、ふや、銭湯、糾の森で聞く古代の音、南座の顔見世、錦市場の賑わいまで、さながら、音の玉手箱でした。

小松さんは「人は視覚情報をつかさどるのに長けた生物、反対に聴覚情報を記憶するのは苦手なところがあるんです。なので、音というメディアは人間が記憶している以上の情報を喚起する力があります」と言われます。なるほど、映像情報は見ていると飽きてきますが、音は人を虜にしてしまう力があるということを感じ取っていただけただけでは、と思いました。

(株) プランツコーポレーション 武部事務所

国際京都学協会主催 (共催 京都造形芸術大学・京都文芸復興倶楽部)

## 「第2回 都市景観の保全と再生研究会」報告

講師 樋口忠彦様 (京都大学大学院工学研究科教授・都市環境計画学)

昨年十二月十四日、樋口忠彦先生の「京都の景色を愉しむ」と題した興味ある講演を聞いた。景色の対象は京都の「東山三十六峰」「洛中洛外図」「庭のロマネスク」「まちの景色」「名所」である。私達がけしきを愉しむようになったのは、平安時代のことからで、それは土佐日記からも

知られるそうだ。一般的には明治時代に入り Landscape の訳語を景観とした頃からであり、特に山容の美が好まれた。その山を神が国見したと伝わる神奈備を理想とした事から話が進められた。庭園の美について、南禅寺を例に取り上げられた。この寺は後方の東山と駒ヶ滝を一体にして観賞すれば一服の山水画を連想することができるという。また、竜安寺の場合では、今は石庭と塀の後ろの借景の妙を云うことが多いが、草創の時代には、多くの天皇陵が麓にある衣笠山を含め庭が作られたものと思われる。同時にそこには間違いなく風水の思想が感じられるという。

このように京都の景観は自然と建物が調和し、山と川が生息する都市とし、日本人は人文的に創造し観賞してきた。一方、西欧人は景観を理系に考え、都市に対して誇りと罪悪感を持って観賞するとされる。

以上、当日に手渡された資料を基に要点を述べてみたが、一時間半程の講演のあとに質疑応答があり、芳賀先生、隴谷先生はじめ多くの質問が飛び交い、半ば討論会風の雰囲気になって、国際京都学協会に相応しい催しであった。なお、樋口先生には『景観の構造』『日本の景観 ふるさとの原型』など多くの著作があることも紹介しておきたい。(Y生)

### 新年名刺交換会

二〇〇七年一月九日、改装なった柘家さんで新年名刺交換会がおこなわれ多数が参加しました。この改装は道田淳さんの手に依るもので、踏襲する和をコンセプトとし、現代の建築の最高技術を駆使した見事なものです。柱をすべて取り除いた大広間は雪吊り構造と云い、三方の庭園は京都の東山、鴨川を擬し、四季の移ろいにより色が変わり花を咲かせ実をつけ、常に変化する様が楽しめる、女将の西村さんのご説明を聞きました。また、圧巻は重要無形文化財に認定された中川清司さんの神代杉、樹齢千年の本画作品の床板でした。建物の外観も、本館、新館が調和し、京都の町並みの景観を全く壊す事もなく完成しています。このようにして、樋口忠彦先生の云われた京都の景観は自然と建物が調和し伝承されていると今更ながら感動しました。